

幕府奏者番にみる江戸時代の情報管理

大友 一雄

はじめに

第一節 奏者番の組織と勤務

第二節 執務情報の組織的伝達

第三節 奏者番手留とその特徴

第四節 奏者番手留と情報活動

第五節 手留の内容と自留の作成

結びにかえて

はじめに

近年、文書・記録の理解や保存公開に関する研究、いわゆるアーカイブズに関わる研究がおおいに進展をみせている。研究対象は多岐にわたるが、文書・記録の保存公開に関わる研究において、もつとも基本となるのは、文書・記

録の存在を、各時代の社会システムのなかで検討することであり、それによって史料の整理や保存管理も適切なものとなる。安藤正人氏が早く史料整理の意義を理論的な整理と、物理的な管理に二分して提示し、史料群理解に関する検討の重要性を指摘した点は、まさにこの点と関わる。⁽¹⁾

それでは文書・記録の存在に関する研究とは如何にあるべきか。アーカイブズ学の体系の中で捉えることが必要となるが、この点に関する提起は、すでに一九九〇年代に大藤修が指摘し、必要とすべき研究の柱を示している。⁽²⁾

ここではそれらの指摘と、その後の研究動向を踏まえ、大きく三つに分けて捉えてみたい。①史料を生み出す組織体の記録管理に関する研究(文書システム研究)、②史料の伝来に関する研究(史料管理史研究)、③史料群が内包する階層的史料群構造に関する研究(史料群構造研究)である。

それぞれを簡単に確認するならば、①は組織体や集団のもとでの文書・記録の発生・管理など、いうならば組織の文書システムと組織における文書・記録のコントロールに関する研究ということになる。従来の古文書学研究は、その多くがこの①に含まれる。②は文書・記録の伝来と組織活動に関する研究である。ここでは組織における文書保管と文書の再利用などに関して、時間的な推移の中で検討することが課題となる。①が組織における現用文書のコントロールを中心課題とするのに対して、②は時間的な経過のなかでの、文書群の伝来と、活用を問題とする。つまり、一義的な役割を終えた文書を対象とするものである。

③は、現存する文書群の調査を通じて、その文書群が内包する構造を究明する。文書を発生させた組織体の構造と機能に関わり、文書群全体を構造的に捉えようとするものであり、現存する文書が対象となるが、史料の有無に関わらず、本来あるべき全体像の追究が重要である。この検討には、①②に関する研究が欠かせない。また、記録のあり方は組織体の構造に大きく規定されたため、これらの研究ではいずれも組織体研究が不可欠になる。

もちろん、実際の研究では①と②が一緒に議論されるなど、融合的な研究もみられるが、文書のライフサイクルを踏まえて研究の柱を見いだすならば、以上のような三つの柱を考えることが可能であろう。また、そうした検討によつて、目録作成、保存、公開などの活動も適切なものになる。利用者の側から捉えるならば、利用環境の整備問題ということになる。⁽³⁾

さて、本稿の目的は、こうした研究の枠組みを強く意識し、江戸幕府における組織体構造やそれに規定される情報管理の一端を追究するものであり、①に関わる研究ということになる。実際の分析では、幕府奏者番に注目し、彼らがどのような情報活動（収集・資源化など）を行ったものか、記録管理という枠をやや広げ、情報管理という視点から検討したい。⁽⁴⁾

第一節 奏者番の組織と勤務

ここでは職務の遂行と情報の関係について考えてみたい。これまでの歴史学研究は、残された史料類を用いて歴史叙述がなされたが、当時の集団や組織はその活動において、文書・記録類とどのように関わっていたのだろうか。文書・記録をどのような形で導入し、社会の様々な活動において役立てていたものか、その点が重要である。そのあり方は組織体の機能や構造に大きく規定されると考えられるため、まず、本稿で取り上げる奏者番職のあり方について確認することから始めたい。

①奏者番に関する研究動向

幕府奏者番とはいかなる存在であつたのか、從來知られるところを、まず確認したい。

文化七年(一八一四)、江戸幕府の役儀ごとの大略を記した『明良帶録』(山県彦左衛門著)には、「君辺第一之職にて、言語伶俐、英邁之仁にあらされは堪へず、披露事其外遠国寺社の御目見之節者奏言す、公家衆より進上の御太刀ハ御老中御取合、此職にて引く、地下之者よりの差上物ハ此職にて披露なり、平日被下物有之時進物番呼上の義、両番頭へ申達する条、明日下されもの有之進物番入候間余計とも何十人差出候様両御番頭へ坊主衆を以て申達、又殿中元服之仁に御前之習札を教へしむ、此場城主の仁多けれ共人才によりて一万石にても勤るなり」とあり、將軍の身辺における重職であり、頭腦明晰な大名でなければ勤まらず、遠国寺社との関係、公家・地下からの太刀進上への関与、平日被下物における両番頭・進物番の指揮、御目見のための習札などを務めとしたこと、役職の大半が譜代大名から選ばれた点などが記される。

また、松平太郎「江戸時代制度の研究」(一九一九年)は「奏者番と進物番」において、次のように記す。⁽⁵⁾

「(前略) 奏者番には当番、助番、非番の制度あり、各交代して事務を執る。新たに奏者番を命ぜらるゝ時は、当番たる迄見習するを以て、老中の退出まで当番と共に残留す、諸席に於て下賜品ある時は、当番の背後に従うて之を見習ふのみならず、凡そ一切の事務は師匠番に就いてその指揮を受く、営中に於ける典礼、儀席の順序等は、都て先例、古格を守り、極めて煩瑣なるを以て、家中の中より留役を任命し、其調査記録に従はしむ、例へば大名叙任する場合には、奥右筆組頭より予め此旨を通告し来るを以て、留役は座席其他儀式に必要な総ての事項を調査し、之を書面に認めて奏者番の参考に供するなり、この外押合及右筆数名を設く、押合の任は、參觀、賜暇、御紋拝領其他の理由にて諸侯の登城する時、之を他の奏者番に通知する如き事務を執る。概ね物頭階級の者

より補せり、右筆は書記役にして平士の文才あるものを選び。奏者番登営する時は、押合、右筆各一人随従するを例とす（後略）

つまり、奏者番は家中から留役・押合・右筆などを任じたこと、留役が殿中での典礼・儀席の遂行に関わり、事前調査を周到に実施したこと、押合は奏者番に従って江戸殿中に登城し、他の奏者番への連絡などを担当したこと、右筆も登城したことが示される。説明が短く具体的なイメージを得ることは難しいが、松平太郎氏の指摘は、奏者番の活動を理解するうえで興味深い内容である。しかし、この面での研究は、その後ほとんど進展がみられない。

他の奏者番研究では、美和信夫氏の奏者番就任者に関する研究⁽⁷⁾があり、就任期間、就任年齢、登用前後の役職などが統計的に示される。また、近年の成果では所理喜夫「土浦土屋藩主歴代と江戸幕府奏者番」⁽⁸⁾が、土浦藩土屋氏代々の奏者番への就任状況を検討する。大名の側から奏者番職を捉えようとした研究である。

以下では、これらの研究を踏まえ、まず、奏者番の組織構造と執務システムについて、情報管理の観点から追究したい。

② 奏者番の勤務形態

奏者番の組織活動を考える場合、その役職が譜代大名担当の役職であり、人数が二〇余人に及ぶ点に留意が必要となる。老中・若年寄・寺社奉行などはいずれも四人余であるため、奏者番の場合、当然、他の職とは、異なる勤務形態や情報管理が考えられるのである。

確認によれば奏者番の勤務形態は、月番制を基本とした老中・寺社奉行などの役職とは異なり、担当が日々交代する日番制の形がとられた。つまり、二十人余の就任者全員が日々江戸城に登城することではなく、基本的には担当の者

一人が登城する勤務形態である。史料ではその担当を「当番」と記す。誰がいつ当番を担当するのか、順番表は毎月月末の二十八日に作成し、部屋に張り出すと同時に、奏者番衆へ回覧する。月半ばで人事異動が起こった場合には、番割も修正された。⁽⁹⁾

寛政十年(一七九八)六月二十日、人事異動などに際して修正された番割(当番割)の内容を示すと次の通りである。⁽¹⁰⁾

本丸当番

西丸当番

二〇日	松平周防守康定	水野老岐守忠韶
二一日	松平能登守乗保	堀田豊前守正穀
二二日	諏訪因幡守忠肅	松平周防守康定
二三日	脇坂淡路守安重	水野老岐守忠韶
二四日	土井大炊頭利厚	松平能登守乗保
二五日	水野老岐守忠韶	諏訪因幡守忠肅
二六日	堀田豊前守正穀	脇坂淡路守安重
二七日	松平能登守乗保	水野老岐守忠韶
二八日	松平右京亮輝和	堀田豊前守正穀
二九日	松平周防守康定	松平能登守乗保

助 順

御鷹之節・御成之節居残順

松平右京亮輝和

松平右京亮輝和

脇坂淡路守安重

松平能登守乗保

松平周防守康定

諏訪因幡守忠肅

水野壱岐守忠韶

脇坂淡路守安重

堀田豊前守正毅

堀田豊前守正毅

松平能登守乗保

松平周防守康定

諏訪因幡守忠肅

水野壱岐守忠韶

この修正に関わつては、阿部播磨守正由・土屋但馬守英直・牧野内膳正康儔の三人が登用されたが、この時点での奏者番は、他に一七人（土井大炊頭利厚・水野左近将監忠鼎・稲葉丹後守正謙・松平右京亮輝和・松平能登守乗保・板倉左近将監勝政・西尾隠岐守忠移・水野壱岐守忠韶・小笠原佐渡守長堯・脇坂淡路守安重・有馬左兵衛佐替純・諏訪因幡守忠肅・植村出羽守家長・牧野日向守貞喜・松平周防守康定・本庄甲斐守道利・堀田豊前守正毅）があり、総数は二〇名である。新任三人がすぐさま番割に加わることはないため、一七人による当番が考えられるが、番割にみえる名前は一〇人程である。この理由には、奏者番が参勤交代する役職（老中・若年寄・寺社奉行などでは在職期間中は参勤交代が免除）であることや、病氣、忌服などによる欠勤が考えられる。

具体的に当番制の様子を確認すると、六月二十日の本丸当番を松平周防守、二十一日は松平能登守が務め、一巡して松平周防守が再び本丸当番を務めるのは、二十九日のことである。ただし、順番が決定しても臨時の御用や、体調

の問題から勤め兼ねることも起こる。その場合に備えて設定されたのが「助番」である。これは交代専門の要員ではなく、番割表の「助順」から明らかなように、当番を務める者によつて組まれたピンチヒッターのローテーションである。なお、病気等から続けて休む場合は、二回までは助番が充当するが、それ以上に及ぶ場合は「御番繰詰」となり、ローテーションから外された。

なお、番割は毎月二十八日の当番が担当する決りであり、この担当者を「御番割元」と称した。途中で組み替えを必要とした場合も、その月の内は同じ御番割元が担当した。

ところで、大御所や世子が江戸城西之丸に入ると、西之丸付が必要となるが、老中職など他の職とは異なり、西之丸専従の者が置かれることはない。奏者番の場合は、本丸・西之丸入り組みの勤務であり、順番に本丸も西之丸も勤める形であった。また、交代が必要となった場合は、本丸当番と同様「助順」によつた。「助順」は本丸・西之丸双方に関わるピンチヒッターのローテーションであつたわけである。

さらに「御鷹之節・御成之節居残順」という順割が存在するが、これは將軍が江戸城を留守にした場合、帰城まで待機する、居残りに関する順番である。

なお、人手を多く要する殿中儀礼や、当番が新任者である場合は、その日に限り「添番」が置かれ、当番を補佐した。添番の順番は先の番割にも見えないが、おそらく助順によつたものと考えられる。

ところで、奏者番の場合、定員のうち四人程の者が寺社奉行の職を兼ねることを常としたが、寺社奉行に任ぜられた者は、奏者番職とどのように関わつたのであろうか。「大岡越前守忠相日記」⁽¹⁾によれば、基本的には奏者番職を勤めるが、多忙となる月番担当時には配慮があり、西之丸当番や添番などが免除された。また、月番担当者に限らず寺社奉行は内寄合や、評定所へ参加するため、それらの日はあらかじめ当番日から外して番割表が作成された。寺社奉

行職を優先する勤務体制といえる。

なお、非番の者の登城も広くみられたが、これはあくまで非公式のものであり、殿中儀礼の習得や奏者番相互の情報交換が目的と考えられる。奏者番は老中に断った上で、襖の蔭などから儀礼の様子を窺うことも認められたのである。

以上のように奏者番の執務は、番割順による当番制を基本とした。助番や添番という交代・補助のシステムが導入されたのも、当番一人による執務を基本としたためといえる。家中の者が押合・右筆として殿中に付き添うものの、当番自身の責任は重く、周到的な準備、なかなづく情報収集が不可欠となったのである。

第二節 執務情報の組織的伝達

二〇余人に及ぶ奏者番が毎日交代で勤務する形態は、どのような情報活動によって実現されたのであろうか。

奏者番の職務情報の取得・管理に関する活動を、組織的な取り組みと、私的な性格の強い取り組みの二つに分け、その実際を具体的に示し、同時に情報の集積・管理方法について検討したい。

①当番廻状による情報伝達

まず、組織的な情報の共有化に関する取り組みを紹介したい。担当者が日々交代する当番制のもとでは、日々の情報を速やかに次の者に伝えること、また、その情報を奏者番全員で共有することが不可欠となった。殿中での儀礼行

為の変更などは、同職の者に速やかに伝達する手段がなければ、殿中儀礼そのものが滞り兼ねない。その不備は、奏者番職全体の責任となろう。また、殿中儀礼全般は老中が統括するところであり、儀礼計画の変更は、奏者番内部の話ではなく、幕府全体に関わる問題となる。こうした意味からも当番から非番の者への、速やかな情報伝達は、職務上極めて重要となったのである。

奏者番が用いた、このための手段の一つが「廻状」であった。廻状は複数の関係者へ同一の情報を伝達するための手法であり、順番に回覧するため、文書作成の面での負担も軽い。奏者番による廻状利用の経緯などは不明であるが、情報共有化の重要性が認識され、その一環として導入されたことが考えられる。⁽¹²⁾

ついては、当番が発した廻状とはどのようなものであったのか、寛政十年六月二十九日、当番阿部播磨守が認めた廻状を示してみたい。この廻状は、奏者番土屋但馬守直英が自らの職務日誌「御奏者番日記」のなかに写し込んだものである。⁽¹³⁾ 日記の記事との異同を確認し、廻状の特色を明らかにするため、土屋の日記もあわせて示すことにする。

〈当番阿部播磨守廻状〉

六月廿九日

当番阿部播磨守

例年之通名越之御被相済申候、以上

銀五枚

土御門使者 岡 監物

右御暇拝領物拙者申渡候様伊豆守殿以專阿弥被仰聞候ニ付、如例於檜之間申渡拝領物頂戴之、前々之通御納戸裏江被相廻置候様松平伊織江申達、右之段御同人江以同人申達候

一明朔日月次之御札其外御札衆有之候ニ付、御札計采女正殿より御渡候、明日之当番松周防殿被詰合候間則相渡候、且又進物番十五、六人被差出候、西丸江も四、五人被差出候様番頭衆江申達候

一明日 西丸添順之通淡路殿被出候様申遣候

一今日拙者儀初御番ニ付添順右京殿・淡路殿候得共、御用有之難被相勤、次順松周防殿為添被出候右之外 殿中変儀不承候、九半時前伊豆守殿就退出罷出候、已上

《土屋但馬守英直日記》

廿九日 晴

初当番播磨

西 丸能登

一五半時出宅浅黄縮
継上下着用 登城

一播磨守初当番ニ付為添松周防守被出候、其外同役衆左之通

大炊頭 淡路殿

老岐守 内膳正

一土御門使者御暇ニ付拝領物席播磨守江松周防守伝達有之ニ付、其節内膳・自分兩人も見習置

一留り候承り、当番播磨・添番松周防・自分・内膳一同中之間江着座、伊豆守殿被通候節播磨守・松周防新番所入口向会釈有之、後少進初播磨守相勤候段申上元之座江着座

一芙蓉之間ニ罷在当番土御門使者差図ニ付謁被申候節不罷越候、又候当番・添番元之席ニ着座、暫過廻り有之詰衆被伺御機嫌候節添番之次ニ見習内膳・自分着座、年寄衆被引当番始部屋江引、少過御札書相渡候段申来候、

当番・添番被出候ニ付為見習中之間江罷出、相濟而部屋江引

一内膳・自分見合帰宅、九半時前廻り後大炊頭明日披露為見置

一初御番無滞相勤候段播磨守江歛申述候

一当番播磨守より廻状到来

廻状では、まず書き出しに、その日の当番名が示され、その上でその日の出来事が記される。この日は「名越之御私被」に関わり下向した公家土御門使者の御暇に関する儀礼があり、当番阿部が拝領物を申し渡している。廻状では次に、明日七月朔日の「月次之御礼」、その他御礼衆の將軍への御目見に関わり、進物番を本丸へ十五・六人、西之丸へ四・五人を手配するよう「番頭衆」に連絡したこと、また、関連して補助のための添番を西之丸に配置すべく、添順に従って脇坂淡路守に明日の登城を連絡したことが記される。

末尾には「今日拙者儀初御番ニ付添順右京殿・淡路殿候得共、御用有之難被相勤、次順松周防殿為添被出候」とあり、初当番である阿部播磨守を補助する添番が、添順では右京・淡路の順であつたが、兩人とも別に御用があるため、次の添順松平周防守が担当したことを明記する。これは事実の確認に止まらず、添順がそこまで進んだことを連絡し、次の者に注意を喚起したものである。

このように廻状は、当日の様子や翌日の準備、当番・助番・添番などのローテーションが確認される内容である。事務的であるが、日々担当が交代する奏者番では、かかる情報が非番の者に的確に伝えられることによって、殿中儀式の円滑な執行が可能となった。情報の伝達では、個別に書状を認めるなど、廻状以外の手段も採られたが、廻状による奏者番全員への情報伝達は、同職にとつてもっと基本的な情報共有化の手段であつたといえる。また、奏者番の人数が多いという面でも廻状は有用な手段であつたわけである。

なお、廻状の作成は、江戸殿中で、当番の指示のもとに、同行の「押合」「書役」がまとめたものと考えられる。⁽¹⁴⁾そこでは伝達すべき情報が過不足なく盛り込まれることが必要であり、廻状は次第に一定のルールに則って記され、書式も整っていったといえそうである。

次に参考にした奏者者による日記に注目し、廻状との異同について論じてみたい。

両者の記述では、まず、最初にその日の当番が記され、次に土屋自身の屋敷からの出発時間と衣装、そして同職者の登城状況が記される。日記では続いて殿中の動向を記す。この日は新任阿部播磨守のはじめての当番であったため、松平周防守が添番を担当したこと、殿中で土御門家使者の御暇の儀式があるため、朝一番にその席の確認が添番松平周防守によってなされ、注意事項などが初当番の阿部に示されたこと、その場に見習中であつた土屋自身と牧野が参加したことなどが記される。老中登城の際には、阿部・松平・土屋・牧野の四人が、芙蓉之間から中之間へ移動して老中を出迎え、初当番阿部が老中に紹介されたこと、土屋と牧野が見習のため同席したことなどが記される。⁽¹⁵⁾

老中登城後、奏者番は芙蓉之間に戻り、しばらくして、老中などの殿中を巡回する「御廻り」があり、当番・添番と、見習の牧野・土屋は並んで挨拶したこと、本来はここへの参加は当番のみであるが、添番・見習二人も参加したことが記される。

さらに、御礼書の引き渡しのため、当番・添番が移動し、ここでも見習のために土屋・牧野が同行する。なお、御礼書は明日七月一日の大名・旗本惣登城による月次の御礼に関わる規式書と考えられる。

廻状と土屋氏の日記記述を比較するならば、両者はともに最初に月日・当番担当者名を記し、ついでその日の出来事を、時間の経過にしたがい記述するなど、構成面では類似点が多い。しかし、記述内容では、廻状の方が儀礼の場の情報などは具体的である。土御門の使者の名前、参府の目的が「名越之御赦」にあったこと、御暇に際して「銀五

枚」が給されたことなど、これらは日記に見られない。翌日の手配や役割分担などに関しても同様である。

いっぽう、日記では、奏者番の執務そのものに関する記述はみられず、土屋自身の動向が中心となる。土屋の登城時間や衣装の記述もそれを物語る。同日の記述では土屋が見習期間中であつたため、その様子が時間の経過に添って、極めて具体的に記される。本人の興味関心にしたがつて記述が進み、廻状とは異なる独自の情報を形づくることになるのである。

日記と比較しながら廻状について検討してきたが、廻状は当番の奏者番から非番のものへ勤務に関する情報を伝達するために利用されたものであり、奏者番にとって公的な情報伝達手段とでもいうべきものであつた。廻状を受けるとその情報は書写され「廻状留」として、各自の手元に集約されることにもなつた。個々人の興味関心から書かれる日記とは、その視点が大きく異なるといえる。また、日記はあくまで私的な取り組みであり、組織的存在ではなかつたことも明らかになつたといえる。

第三節 奏者番手留とその特徴

①奏者番手留の存在

当番から非番の者への日々の情報伝達について、組織的な取り組みである「廻状」に注目して述べたが、ここでは、主体的な情報収集・資源化の活動について、各奏者番に広く作成が確認できる奏者番手留を事例に考えてみたい。その際、とくに情報が如何なる形態をとつて資源化されたものか留意したい。つまり、情報の資源化に関わる問題は、

紙媒体をどのように利用し、それをどのように管理したのか、それらも加味して検討することが必要と考えるものである。

分析では、愛知県田原市博物館収蔵の大名三宅家文書にみられる奏者番関係文書に注目したい。なお、同家では奏者番職へ二人の者の就任を確認できるが、現存する奏者番関係文書はその内容から判断して、三宅土佐守康直に関わるものとみられる。同人の藩主就任は文政十一年（一八二八）一月二十七日、奏者番在職期間は天保十二年（一八四二）十二月八日から嘉永二年（一八四九）十二月十日までである。

大名三宅家の奏者番手留は、現在、大小二つの文書筆筒に収納され伝えられる。写真aは大きな筆筒を、表蓋を外して撮影したものである。表蓋には「御奏者番御手留」とある。写真bは小さな筆筒のものであり、表蓋には「御自留」と記される。

大きな筆筒は横九四cm×縦六一・七cm×奥行き四三cmの、どっしりとした作りであり、六段の引き出しが作り込まれる。各引き出し内は六つに仕切られ、各仕切りのうちに手留が収納される。筆筒全体での手留数は二千点余に及ぶ規模である。

手留の形状は、じゃばら折で折り畳んだときの大きさは一七・五cm×八・四cm程であり、ちょうど筆筒の仕切りに納まる。筆筒の構造からして、筆筒作成が手留収納にあることは明らかである。なお、手留の折を広げた時の長さは、記事の分量によって左右されるが、長い物では数mに及ぶこともある。

また、写真aに明らかなように各引き出しには収納される手留を示す内容ラベルが付される。ラベルの記述は次の通りである。

〈イのラベル〉 管弦奏楽 所司代御城代拝借物 縁組用紙願済御暇仕候旨留 御代官拝借物 新役被仰付候留 初雪



写真 a 田原藩三宅家奏者番手留筆筒

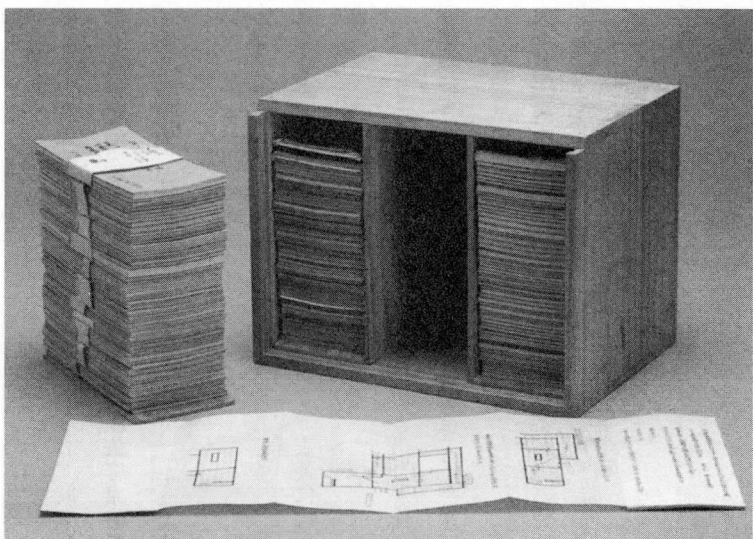


写真 b 田原藩三宅家奏者番自留筆筒

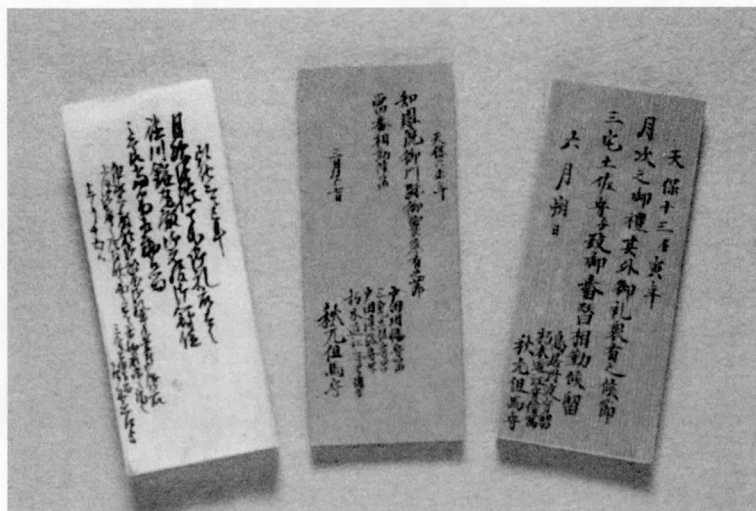


写真 c 館林藩秋元家奏者番手留

御機嫌伺	土用人御機嫌伺	□□□御暮之御
襄美	碁将棋之者拝領者	本丸御誕生日御祝
儀	法事済惣出仕	検校拝借物
御手伝家来	拝借物	
御文庫人之分		
ハのラベル	西丸中之間助西丸朝助	凶事御機嫌伺
習礼	留	公家衆御返答
西之丸当番添番	参勤御	
御礼	願書進達	
公家衆御能	同御対願	同御返答
ホのラベル	御三家	元服
歳暮御祝儀上り	端午御祝儀	
上り	重陽御祝儀上り	鯖代
ヘのラベル	□□	月次当番
西丸遠御成	七種	七
夕		
トのラベル	□□	日光御門跡并知恩院之部
日光御	名代御祭礼奉行御暇拝領物	御本丸円乗後之
留		
進添名代退役願	西丸初御番添番	紅葉山御
筑御用	阿蘭人御暇	遠之部
御本丸初御番		

添

〈リのラベル〉 病後之御礼 出勤御届 倅官位 習礼罷越 御次第書 御手扣 惣出仕 御退役相談

〈ヌのラベル〉 年始 寺社御礼 八朔 玄猪

〈ルのラベル〉 三山

〈ラのラベル〉 四月御暇参勤 御刀被下肝煎 月次講釈 十二月廿八日歳暮御鷹之鷹其外拝領 惣而御内書 惣而御

座席奉行 平日色々 御鳥拝領当番

〈ワのラベル〉 □□

〈カのラベル〉 御黒書院表肝煎 同御勝手肝煎 御白書院表肝煎 同御勝手肝煎

〈ヨのラベル〉 参勤御礼 御在所江之御暇 御祝儀惣出仕 御役儀誓詞并御役儀御礼御願 御役儀御礼 初御番 二

度目御番 御奏者番被仰付候節御本丸見習 明細書 □

〈タのラベル〉 上使 御名代

ラベルにはイロハの文字が記された上で、収納される手留の内容が示される。なお、ラベルのイロハ文字はイからソまで続くが、ここではタの記述まで示した(□□は欠損を示す)。

ラベルの記述からは、奏者番が多く殿中儀礼に関係したこと、それらに関する情報を手留として集約していたことが推察される。また、手留は内容に応じて分類され、見出しとなる柱を立てそのもとに管理する方式が採られた点にも注目される。なお、ヨのラベルのもとには、奏者番が就任から一人前になるまでの関係情報が収納されており、奏者番が執務において必要とする公私にわたる諸情報を、ここに集約しようとしていたことが考えられる。奏者番の

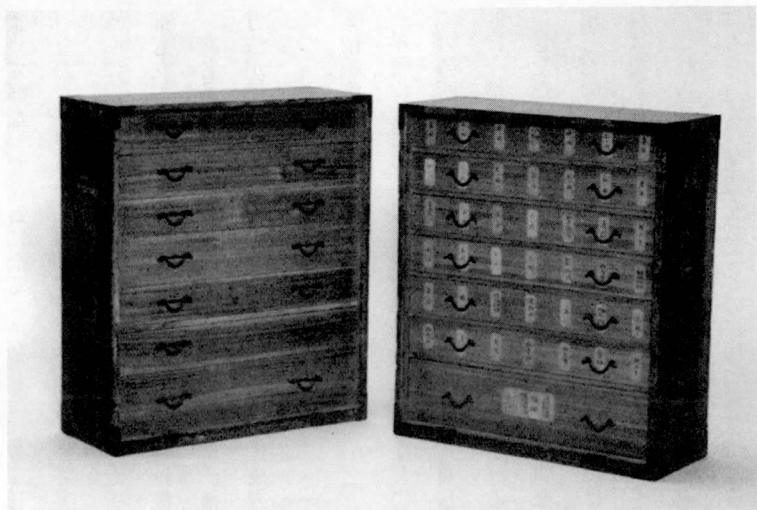


写真 d 館林藩秋元家奏者番手留筆筒

情報管理を考える上でたいへん興味深い存在といえる。

また、ラベルを幾度か張り替えた箇所がみられる。これは手留の増加などにより、各引き出しに納められる手留の内容とラベル記述に齟齬を来した結果と考えられる。つまり、手留は奏者番就任初発段階にすべてが揃えられたものではなく、次第にその数量を増やしたということである。この点に関しては後に論証したい。

ところで、たいへんよく似た筆筒（写真 d）が、上野国館林藩秋元氏のもとにも存在した。⁽¹⁶⁾ 筆筒のラベル記述を田原藩同様に書き出すならば、「年始」「八朔五節句」「月並」「増上寺」「上使」「惣出仕」「公家衆」「参勤御暇都而御礼」「御能」「上野」「元服」「御三家日光寺院拝領物」「添」「遠御成」「管弦奏楽非常退役」「雑」「御内書」「三季・鯖献上」「御祝儀」「紅葉山」「新役」「御縁組」「將軍宣下御転任御兼任槐」「嘉祥・玄猪」「度々被仰渡拝領」である。田原藩三宅氏のラベル記述と比するとたいへん簡潔であり、見出しの数も少ない。手留の総数も七〇〇余とやや少ない。しかし、情報に片寄があるということではなく、ここでのラベル記述で、情報の全

体をカバーするとみてよからう。つまり、手留情報をどのような柱の元に管理するのか、情報全体の捉え方は、家によつて異なつたことになる。手留とは、そうした裁量のもとに管理される存在であつたのである。

なお、手留そのものは、田原藩や館林藩に限られず、各所でその存在を確認できる。都立大学所蔵の水野家文書のうちには、水野忠邦・忠精が奏者番を勤めた折の手留が多数存在する。また、学習院大学史料館収蔵の武蔵国忍藩阿部家文書、東京大学史料編纂所収蔵の米倉丹後守関係文書などにも手留を確認できる。

奏者番を勤めた多くの家々が、手留を用い情報を集約していたことは間違いない（詳しくは後述）。なぜこのような方法が採用されたのか、具体的な手留の作成方法なども含め検討することが必要とならう。

②情報集約手段としての手留とは

手留作成について、手留の特徴・役割などに留意しながら考えたい。まず、手留の形状に注目するならば、これまでの各所における調査から、その形状は共通し、表紙・裏表紙を付し、本文をじゃばら折とする。また、手留は基本的に一情報につき手留一点の割合で作成される。その結果、手留数は数千点に及ぶわけである。

したがって、手留の作成には、多くの時間を要することになるが、手数の掛かる手留という方法をなぜ奏者番は採用したのであろうか。情報を集約する方法には、手留以外の方法も存在するはずである。手留を採用した理由を考えねばならない。

これらの問題では、情報資源化の目的に関連して、情報の収納形態にも注意を払う必要がある。容器などへの収納はもちろん、情報を紙などの媒体に書きつける行為も対象となる。

さて、数千点にも及ぶ手留を文書筆筒のような収納容器に、内容ごとに分類し、インデックスを付して配列すると

いう情報の収納形態は、情報の使い勝手を考えた収納といえる。情報の収納形態には、さまざまなものがあり、類似のものでは、たとえば帳面を利用する方法がある。すなわち、情報を内容分類したうえで帳面に順番に記す方法は、手留筆算を利用して手留を管理する方法と基本的に同じ発想といえる。そして、その方法は情報一件ごとに単独の情報体として成立させる手留に比して、作業量ははるかに少ない。表紙を付すことも、じゃばら折にする必要もないわけである。

この帳面を利用して情報を収納する方法は、大量の文字情報を管理する方法としてはもともと一般的な方法である。奏者番の場合も、その利用を少なからず確認できる。たとえば、奏者番を勤めた大名土屋家文書にみられる「奏者番勤方并心得」⁽¹⁷⁾もその一つである。この帳面では「当番勤方并心得」「御番之事」「病氣之節取扱之部」「火事之部」「新役心得」「差控之部」「雑之部」という見出しが用意され、その元に関連する情報が記される。大きさは縦十六・五cm×横二十二・八cmと小ぶりであるが、料紙には薄い雁皮紙を用い、文字も細かいため、たいへんコンパクトな仕上がりであり、情報量も多い。

それでは情報管理における帳面利用と手留利用では、どのような違いがあるのだろうか。両者の違いを明らかにするなかで情報管理手段としての手留について考えてみたい。

まず、両者の共通点を挙げるならば、見出しを作成し、そのもとに情報を収納することがある。発想的には同じような情報管理とすることもできるが、情報の収納形態という点では両者に相当の違いを指摘できるのではないか。たとえば、新規情報や追加・変更事項が発生した場合、帳面型では、多くは貼紙や掛紙などによって修正されることになる。そして、その数が増えれば、全体の作り直しが必要となるわけである。したがって、通常、帳面型は、情報に訂正・追加が頻繁に起らない場合や、情報が追加されるにしろ単純に後ろに追加して支障がない場合にのみ利用され

ることになる。

一方、手留では、新規の情報を受け入れる場合、手留を作成し、筆筒などの収納容器のしかるべき箇所に納めれば済む。修正を要する情報が発生した場合は、該当する手留を作り替えれば済む。つまり、手留を利用することで、インターで情報管理をするような形で管理が可能となるのである。新規情報の追加、不要情報の削除が、極めて容易に行える点が特徴である。

また、折本という形態にも注目したい。折本の特徴は、全体を広げなくても読める点にある。手元で繰っていけば、殿中でも他者に目立つことなく、必要とする箇所を確認できる。奏者番が江戸殿中に持参し、規式執行の準備に利用することも可能である。もちろん、帳面型もコンパクトに作成することは可能であるが、情報を完備すればするほど大部なものとなってしまう。情報完備と利便性は矛盾するのが一般である。しかし、手留であれば、必要な情報のみを携帯することが可能である。

実際の奏者番の情報管理においては、帳面と手留がそれぞれの場面で必要に応じて使い分けられていたとすべきである。

さて、以上のような奏者番手留の特色からは、手留の新規発生や殿中利用などがたいへん頻繁であったことになりう。次に手留の作成について考えてみたい。

第四節 奏者番手留と情報活動

① 田原三宅氏の手留書写系統

田原藩の手留筆筭「御奏者番手留」では、各引き出しに「イロハ文字」を記し、内容分類のうえ手留を収納するが、その際内容の同じものを帶封でひとまとまりに結束して収納する。ここでは、イの引き出しの最初の三束を便宜的に取り上げ、手留の書写行為について考えてみたい。ちなみに、三束の内容は第一束目が年末の煤払い行事、二束目は養子縁組みなど、三束目は殿中での奏楽・舞楽等に関するものである。

〈奏者番手留の書写系統〉

イの引き出し（一束目）

文化10年 松平壱岐守留↓三宅土佐守

文化13年 小笠原相模守留↓安藤対馬守写↓石川主殿頭↓三宅土佐守

文政元年 小笠原相模守留↓三宅土佐守

文政元年 安藤対馬守留↓石川主殿頭↓三宅土佐守

文政3年 小笠原相模守留↓三宅土佐守

天保3年 松平和泉守留↓内藤大和守↓安藤対馬守↓石川主殿頭↓三宅土佐守

イの引き出し（二束目）

寛政6年 松平右京亮留↓堀田豊前守↓三宅土佐守

享和元年 松平右京亮留↓堀田豊前守↓三宅土佐守

文化元年 堀田豊前守留↓三宅土佐守

文化10年 内藤豊前守留↓内藤大和守↓松平伊豆守↓板倉周防守↓三宅土佐守

文化11年 松平伯耆守留↓内藤大和守↓松平伊豆守↓板倉阿波守↓三宅土佐守

文政5年 土屋相模守留↓板倉阿波守↓三宅土佐守

文政11年 石川主殿頭留↓三宅土佐守

文政11年 土井大炊頭留↓堀田豊前守↓三宅土佐守

イの引き出し (三束目)

文政9年 本多下総守留↓板倉阿波守↓三宅土佐守

天保2年 石川主殿頭留↓三宅土佐守

天保5年 戸田因幡守留↓板倉阿波守↓三宅土佐守

天保6年 朽木隠岐守留↓板倉阿波守↓三宅土佐守

この書写系統は、手留の表紙左側に見られる記事に基づきにまとめたものである。たとえば、一束二番目のものであれば、「小笠原相模守留 安藤対馬守写 石川主殿頭より借写 三宅土佐守」とある。これは小笠原相模守が作成した手留を安藤対馬守↓石川主殿頭↓三宅土佐守というように書写したことを示している。また、「石川主殿頭より借写」とある点からは、手留を借用のうえ書写したことも明らかである。手留は関係者の間で貸借され、それを書写することで発生したわけである。なお、最初に記される「小笠原相模守留」という表記からは、「御用留」「書留」などのような簿冊型の記録であることを連想させるが、後述のごとく手留そのものを指す。手留そのものを貸借し、それを書写したのである。ただし、小笠原相模守が作成した手留の書写は、決して小笠原相模守↓安藤対馬守↓石川主

殿頭→三宅土佐守という系統に限られたわけではない。これは三宅氏に伝えられた手留の書写系統であり、他にも様々な書写の流れが考えられる。つまり、小笠原相摸守から手留を借り出したのは、安藤対馬守のみとはいえず、安藤対馬守が書写した手留を写した人物も石川主殿頭のみとは限らない。一点の手留はピラミッド型に書写のすそ野を広げたのであり、いくつもの書写系統が存在した。その展開は、奏者番の定員が二〇人と多かったことから想像される。

それでは、手留の借入先は特定の相手に限られたのであろうか。三宅の手留借入先に注目すると、前掲一八点の借入先は六箇所¹⁸に及ぶ。もつとも多いのは、板倉阿波守（五点）と石川主殿頭（五点）、ついで堀田豊前守（四点）、小笠原相摸守（二点）、松平老岐守（一点）、板倉周防守（一点）である。ちなみに奏者番職には古参の者が世話役となり、新任の者を指導する師範・弟子制度が存在したが、三宅の師範である板倉周防守からの情報は、右の場合、一八点のうちわずかに一件であり、三宅が師範・弟子関係にとられず、同職者のものから広く手留情報を取得したことが明らかである。

また、手留の借入先は、現職の奏者番に止まらず、離職者も対象となった。たとえば、書写系統一覧の最初に見られる文化十年（一八一三）松平老岐守留は、松平老岐守の在職期間中（文化五年→文政七年）に作成されたが、三宅氏の借入は、天保十二年（一八四二）のことである。また、一束三番目の文政元年小笠原相摸守留の場合、相摸守の在職期間は文化十三年→文政十二年までであり、この場合も三宅氏の在職期間から外れる。文化元年の堀田豊前守留の場合も同様である。

手留貸借の範囲は、どこまで広がったのか、さらに事例を集める必要があるが、ここでは、情報のネットワークが在職者を越える場合、貸借を成立させたものは何か、その点に注目したい。奏者番経験者も含めた情報のネットワーク

クは奏者番を経験したという連帯意識なのであろうか。しかし、そうではなからう。どの家から借覧するか、その選択は個々の家の判断に委ねられる。家相互の関係が存在してはじめて、情報の交換が可能になったと考えられる。手留は、奏者番という役職を越えて、私的な取り組みによつてはじめてその収集が可能になったと考えざるをえないのである。

②「御手留借込帳」にみる手留の流通と生成

手留は広範な貸借・書写行為を通じて、奏者番職の者の手元に蓄積されたが、実際の貸借状況を田原藩三宅家文書群中の二つの帳簿、「御手留借込帳」(弘化二年五月改)と、「御手留御貸出帳」(天保十四年十一月)を通じて検討したい。

「御手留借込帳」は、三宅が他の奏者番から手留を借覧した際の記録簿であり、借覧した手留の内容、発生年次、発生源、借用日、返却日などが記される。なお、同帳の記述は弘化二年(一八四五)五月に始まるが、表紙に「弘化二年五月改」とあるため、五月に旧帳から新帳に更新したことが考えられる。三宅の奏者番就任は天保十二年(一八四二)十二月八日であるから、この直後から同様の記録が作成され、ここで更新したものであろう。一方の「御手留御貸出帳」は、三宅が他の奏者番からの求めに応じて手留を貸し出した際の記録である。

まず、「御手留借込帳」の記載をまとめた一覧表に注目したい。最初のものであれば、朽木讃岐守による天保五年(二八三四)六月三日付けの手留「参勤之御礼願書差出候留」を、板倉周防守から弘化二年(一八四五)五月三日に借り、同年六月四日に返却したことを示している。ちなみに三宅は、五月三日に板倉周防守から都合六名の記録を借りるが、その内容はいずれも「参勤之御礼願書差出候留」である。それらの六名のそもその出所は、安藤対馬守(二点)、松平伊豆守(二点)、朽木讃岐守留(二点)、安藤大和守(二点)であった。

弘化2年5月改御手留借込帳（田原市立博物館）

No	情報発生年月日	借用手留名/内容	手留発生源	借用先	借用日	返却日
1	天保5年6月3日	参勤之御礼願書差出 候留	朽木讃岐守留	板倉周防守	5月3日	6月4日
2	文政5年6月3日	参勤之御礼願書差出 候留	安藤対馬守留	板倉周防守	5月3日	6月4日
3	文政3年6月3日	参勤之御礼願書差出 候留	安藤対馬守留	板倉周防守	5月3日	6月4日
4	文政7年9月18日	参勤之御礼願書差出 候留	松平伊豆守留	板倉周防守	5月3日	6月4日
5	文政5年7月18日	参勤之御礼願書差出 候留	松平伊豆守留	板倉周防守	5月3日	6月4日
6	文政11年6月5日	参勤之御礼願書差出 候留	安藤大和守留	板倉周防守	5月3日	6月4日
7	—	御奏者番系図	鳥居丹波守	鳥居丹波守	6月8日	12月28日
8	文政9年6月16日	嘉祥当番相勤候留		本多豊後守	6月10日	6月11日
9	6月13日	御暇之節当番相勤候 留・非番二而罷出御 披露相勤候留(40折)		板倉様	6月13日	12月8日
10	天保9年6月13日	帙入10冊（年始）		師範様	6月17日	11月8日
11	天保15年1月28日	月次御礼白書院肝煎 初而勤候留		伊東修理太夫	6月24日	8月16日
12	天保15年4月1日	松平大隅守参勤御礼 等勤候留		伊東修理太夫	6月24日	8月16日
13	天保10年6月1日	月次御礼其外肝煎勤 候留		鳥居丹波守	6月25日	8月16日
14	天保13年5月1日	月次御礼非番二而肝 煎勤候留		鳥居丹波守	6月25日	8月16日
15	天保13年4月28日	月次御礼非番二而肝 煎勤候留		鳥居丹波守	6月25日	8月16日
16	天保15年2月28日	月次御礼非番二而肝 煎勤候留		鳥居丹波守	6月25日	8月16日
17	天保12年12月28日	不時御礼肝煎勤候留		鳥居丹波守	6月25日	8月16日
18	天保8年6月1日	月次御礼其外肝煎勤 候留	新庄主殿頭	戸田因幡守	7月3日	8月16日
19	天保12年7月7日	七夕御祝義助番勤候留		伊東様	6月6日	7月4日
20	天保12年7月7日	七夕御祝義当番勤候留		伊東様	6月6日	7月4日
21	天保14年7月7日	七夕御祝義当番勤候留		伊東様	6月6日	7月4日

22	文政元年 5 月 5 日	端午助番勤候留(手留)		土屋采女正	7 月 5 日	7 月 6 日
23	天保12年 8 月21日	檜之間に着御礼助番 勤候日記書拔		牧野山城守	7 月 9 日	7 月10日
24	天保12年 8 月21日	檜之間に着御礼助番 勤候日記書拔		鳥居丹波守	7 月10日	7 月10日
25	天保13年 7 月14日	紅葉山予参勤候留		鳥居丹波守	7 月12日	8 月16日
26	天保10年 7 月14日	紅葉山予参勤候留		鳥居丹波守	7 月12日	8 月16日
27	天保14年 3 月28日 — 4 月29日	尾州へ上使相勤候留	加納遠江守留	牧野山城守	7 月12日	7 月12日
28	天保10年 3 月26日 — 4 月29日	尾州へ上使相勤候留	加納遠江守留	牧野山城守	7 月19日	7 月21日
29	天保13年 7 月15日	西城当番之留		鳥居丹波守	7 月14日	7 月15日
30	—	松平建之丞様手留		松平建之丞	7 月 3 日	11月 2 日
31	天保15年 6 月 1 日	西之丸当番相勤候留	岡部内膳正留		7 月22日	10月玄猪
32	天保15年 5 月10日	西之丸添番相勤候留	牧野山城守留		7 月23日	
33	天保15年 6 月 4 日	西之丸当番相勤候留		岡部内膳正	7 月22日	7 月25日
34	文政12年10月17日	水戸殿逝去当番勤候留		内藤大和守	7 月23日	8 月16日
35	文政10年 6 月13日	徳川式部卿逝去当番 勤候留		内藤大和守	7 月23日	8 月16日
36	天保10年 3 月29日 — 4 月 2 日	尾張殿逝去当番勤候留		鳥居丹波守	7 月23日	7 月24日
37	文政10年 2 月28日	西之丸当番相勤候留			7 月26日	8 月16日
38	天保11年 8 月 1 日	非番御手留		鳥居様	7 月28日	8 月16日
39	天保14年 8 月 1 日	八朔祝義西丸添番勤 候留		鳥居様	7 月28日	?
40	文化 6 年 7 月 1 日	御中陰心付月次当番 勤候留		大岡主膳正留	7 月	8 月16日
41	天保 3 年 8 月 1 日	八朔手留	水野壱岐守留	牧野河内守より 直借	8 月 1 日	9 月 2 日
42	天保 5 年 8 月 1 日	八朔手留	本多豊前守留	牧野河内守より 直借	8 月 1 日	9 月 2 日
43	天保 5 年 8 月 1 日	八朔手留	本庄伊勢守留	牧野河内守より 直借	8 月 1 日	9 月 2 日
44	天保 7 年 8 月 1 日	八朔手留	本庄伊勢守留	牧野河内守より 直借	8 月 1 日	9 月 2 日
45	文政13年 8 月 1 日	八朔手留	大岡主膳正留	牧野河内守より 直借	8 月 1 日	9 月 2 日

46	文政9年8月1日	八朔手留	大岡主膳正留	牧野河内守より直借	8月1日	9月2日
47	文政11年8月1日	八朔手留	堀田豊前守留	牧野河内守より直借	8月1日	9月2日
48	天保11年3月16日	講釈院閑候留		丹波守より	8月12日	8月15日
49	文政13年2月10日	講釈院閑候留		丹波守より	8月12日	8月15日
50	文政12年2月10日	講釈院閑候留		丹波守より	8月12日	8月16日
51	寛政10年5月15日	月次御礼当番之留		諏訪様より	8月12日	9月6日
52	天保13年12月19日	天保十三年十二月十九日之留		安藤封馬守		9月2日
53	文政6年12月19日	土屋采女正(留)		土屋采女正より		9月2日
54	天保15年7月21日	水戸様御家督御礼之当番留		建部様	8月23日	午3月21日
55	文化13年10月23日	水戸中将殿御家督御祝之書留		鳥居丹波守	8月26日	9月2日
56	文政10年8月28日	尾張中将殿御家督御礼之節当番相勤候留	大井淡路守留	鳥居様	8月24日	9月2日
57	文政10年8月28日	尾張中将殿御家督御礼之節登城留	西尾隠岐守	鳥居様	8月24日	9月2日
58	文政10年8月29日	尾張中将殿御家督御礼之節登城留	本多下総守	鳥居様	8月24日	9月2日
59	寛政12年2月28日	尾張中将殿御家督御礼之節当番之留	有馬九兵衛佐留	因幡様		9月2日
60	天保13年4月	天保十三年日記		松平伯耆守様	8月26日	9月19日
61	弘化2年	右大将様御成遡御目見等当番留		松平市正留	8月26日	9月2日
62	弘化2年5月18日	公方様上野殿有院へ参詣之節当番留	松平市正留	松平市正様	8月26日	9月2日
63	文政10年9月1日	大井淡路守留	大井淡路守留	師範様	8月27日	11月8日
64	文政11年9月1日	堀田豊前守留	堀田豊前守留	師範様	8月27日	11月8日
65	天保2年9月1日	板倉阿波留	板倉阿波留	師範様	8月27日	11月8日
66	文政11年9月1日	内藤大和守留	内藤大和守留	師範様	8月27日	11月8日
67	—	肝煎之覚	戸田因幡守留・鳥居様御留	若狭様	8月27日	9月2日
68	文政10年9月2日	尾張中将殿御家督御礼助番相勤候留	大井淡路守留	修理様	9月2日	9月6日
69	天保14年9月3日	新庄主殿頭留	新庄主殿頭留	新庄主殿頭	9月3日	9月3日

70	天保13年5月6日	新庄留	新庄留		9月4日	12月28日
71	天保2年7月1日	板倉阿波留	板倉阿波留	板倉周防守	9月6日	閏5月12日
72	文政12年12月15日	九鬼留	九鬼留	板倉周防守	9月6日	閏5月12日
73	文政6年10月15日	本多豊後守	本多豊後守	板倉周防守	9月6日	閏5月12日
74	天保8年12月28日	内藤紀伊留	内藤紀伊留	板倉周防守	9月6日	閏5月12日
75	文政6年4月1日	土屋相模守留	土屋相模守留	板倉周防守	9月6日	閏5月12日
76	文政8年4月1日	土岐山城留	土岐山城留	板倉周防守	9月6日	閏5月12日
77	文政4年1月28日	松平伊豆守留	松平伊豆守留	板倉周防守	9月6日	閏5月12日
78	文政元年9月15日	本多豊後守留	本多豊後守留	板倉周防守	9月6日	閏5月12日
79	文化3年2月15日	松平右京亮留	松平右京亮留	板倉周防守	9月6日	閏5月12日
80	文化6年10月15日	松平老岐守留	松平老岐守留	板倉周防守	9月6日	閏5月12日
81	文政3年6月15日	土屋相模留	土屋相模留	板倉周防守	9月6日	閏5月12日
82	寛政12年11月15日	内藤大和留	内藤大和留	板倉周防守	9月6日	閏5月12日
83	文化15年1月28日	松平伊豆留	松平伊豆留	板倉周防守	9月6日	閏5月12日
84	文化7年6月1日	松平老岐守留	松平老岐守留	板倉周防守	9月6日	閏5月12日
85	文化3年10月15日	本多豊後留	本多豊後留	板倉周防守	9月6日	閏5月12日
86	文政13年12月15日	間部下総留	間部下総留	板倉周防守	9月6日	閏5月12日
87	天保3年12月15日	土屋相模留	土屋相模留	板倉周防守	9月6日	閏5月12日
88	文政13年2月15日	脇坂中務留	脇坂中務留	板倉周防守	9月6日	閏5月12日
89	文政12年12月1日	本多下総留	本多下総留	板倉周防守	9月6日	閏5月12日
90	寛政12年閏4月1日	松平周防守留	松平周防守留	板倉周防守	9月6日	閏5月12日
91	文政7年5月1日	太田摂津留	太田摂津留	板倉周防守	9月6日	閏5月12日
92	天保2年12月15日	九鬼長門留	九鬼長門留	板倉周防守	9月6日	閏5月12日
93	文政9年10月1日	松平宮内少輔留	松平宮内少輔留	板倉周防守	9月6日	閏5月12日
94	文政9年5月15日	松平宮内少輔留	松平宮内少輔留	板倉周防守	9月6日	閏5月12日
95	文政5年12月1日	松平伊豆守之留	松平伊豆守之留	板倉周防守	9月6日	閏5月12日
96	文政4年10月15日	丹羽長門留	丹羽長門留	板倉周防守	9月6日	閏5月12日
97	文政12年8月15日	土屋相模留	土屋相模留	板倉周防守	9月6日	閏5月12日
98	天保15年2月20日	公方様上野参詣之節 之留		伊藤修理太夫	9月6日	9月12日
99	天保13年2月20日	公方様上野参詣之節 之留		伊藤修理太夫	9月6日	9月12日
100	天保12年9月10日	—			9月9日	
101	天保12年9月10日	—			9月9日	

102	天保3年9月15日	肝煎之留		大膳様	9月12日	
103	天保5年1月28日	肝煎之留		大膳様	9月12日	
104		御白黒書院太刀目録 疊付			9月13日	9月13日
105	天保12年4月28日	月次御礼其外肝煎相 勤候留		牧野山城守	9月13日	10月11日
106	天保12年4月1日	月並御礼其外肝煎相 勤候留		牧野山城守	9月13日	10月11日
107	天保15年2月15日	月並御礼其外肝煎相 勤候留			9月13日	10月11日
108	天保14年8月23日	公家衆并東本願寺御 対顔之節助番相勤候留		伊藤修理太夫	閏9月19日	11月2日
109	—	当四月十七日助番之 御日記書抜	戸田淡路守留			9月23日
110	天保9年11月14日	甲州川之御普請御用 勤留		松平右京亮	9月22日	12月28日
111	天保3年3月29日	於柳之間水野出羽守 家来拝領添番留		安藤対馬守	9月21日	12月28日
112	天保9年	甲州川之御普請御用 拝領物添番留		松平右京亮	9月22日	12月28日
113	天保10年5月29日	御番替相勤候留	加納遠江守留			
114	天保11年9月7日	公家衆御馳走御能之 節致御番替候留	青山大和守	中務様	9月22日	10月11日
115	文政8年6月13日	御暇之衆并御礼衆当 番留	牧野越中守	牧野遠江守	9月22日	12月晦日
116	天保10年3月1日	公家衆御馳走御能之 節致御番替候留	鳥居丹波守留	松平若狹守	9月23日	12月28日
117	天保11年9月5日	公家御対顔御披露御 番替勤候留		牧野山城守	9月24日	
118	天保13年2月24、25日	公家御対顔之節当番留		牧野山城守	9月24日	
119	享和3年閏正月28日	日記書抜	大久保安芸守留	大久保加賀守	9月26日	11月朔日
120	天保9年2月27日	公家衆御番替相勤候留		本多豊前守	9月24日	11月朔日
121	天保4年3月2日	公家衆御返答留		牧野山城守 (直借)		
122	天保3年3月4日	公家衆御返答留		牧野山城守 (直借)		
123	文政13年3月2日	公家衆御返答留		牧野河内守 (直借)		
124	文政8年8月15日	月次御礼		本多	9月晦日	11月2日

なお、「参勤之御礼願書差出候留」などある「留」が、簿冊型の記録ではなく、手留そのものを指すことは、「御手留借込帳」に、「六折共参勤之御礼願書」「右六折六月四日以御刀番奉札一先御返却ニ相成候」というように、単位を「六折」とする点からも明らかである。この「折」という形態は、いわゆる「じゃばら折」であることを意味している。手留は簿冊型の留帳を借用して作成されたのではなく、手留を借用して手留を作成したことになる。手留表紙への書写系統の記述も、同じように書写するからこそ成立したわけである。また、同じように書写する中で手留の大ききなども次第に均質化し、同じような保管のための筆筭を造らせることにもなったのである。館林・田原両藩の手留と収納箱が、たいへん似ているのも、こうした理由からと考えられる。とまれ、「御手留借込帳」(一覽表)によつて、田原藩三宅氏の手留借入れの様子を探ってみた。

まず、借入先を確認するならば、その数は極めて多く、特定の人物に限定されない。また、特定の人物であっても借入行為は、一度ではなく、頻繁に繰り返される。鳥居丹波守であれば、六月十二日、六月二十五日(五件)、七月十日、七月十二日(二件)、七月十四日、七月二十三日、七月二十八日(二件)、八月十日(三件)という具合であり、一度に大量に借用するのではなく、必要に応じて借用する方法が取られた。

具体的には、五月三日、参勤交代に関する手留六折を、板倉周防守から借用するが、これは参勤交代の季節となり、殿中での対応に関係した借覧と考えられる。また、八月一日には殿中儀礼八朔に関する手留七折を、牧野河内守から直借するが、八朔の手留を八月一日に借用したのでは事前準備にならない。これは八朔を終えた殿中で、今後の参考のために、三宅が牧野河内守より直接借用したものであろう。さらに、六月十日には「嘉祥当番相勤候留」を本多豊後守から借用して、翌日に返却する。この手留の借用は、「嘉祥」の祝儀が六月十六日にあったことによる。

以上のように儀礼の執行に関わり、奏者番は関連の情報を収集する。その方法は、その年の状況に応じて最適な先

例情報を収集するものであった。もちろん、手元にないものを補充するような、普段からの心掛けによるものもあつたに違いない。

それでは収集量はどれ程の分量であつたのだろうか。借入帳から手留借入状況を月ごとに集計すると、弘化二年（一八四五）五月が六件、六月一六件、七月二〇件、八月二五件、九月六一件、十月二二件であり、毎月相当数の手留を借り入れ書写する。また、手留の収集は、天保十二年（一八四一）十二月八日に三宅が奏者番に就任以降、三年を経て引き続き実施されていたことになる。手留の書写行為は短期間の取り組みによつて貫徹するのではなく、恒常的な行為として存在したことがここからも明らかである。執務のための情報の伝達・収集は、多く新任者固有の行為であるが、手留の収集は一定の経験を踏んだ奏者番であっても欠かせなかつたのである。それは、殿中儀礼の場が厳しく先例を求めた結果といえる。

つまり、儀礼の場合は、將軍と大名・旗本・寺院などそれぞれの身分家格が視覚的に表現される場であり、儀礼の方式の変更は、参加する家々の家格や存在そのものに関わる問題であつた。言い換えるならば、そうした状況を踏まえて儀礼が執行されることによつて、奏者番の職権が維持されるわけである。つまり、奏者番は、自己の存在の証として情報の集積に努めたことになる。

また、過去の情報を周知することは、奏者番相互の合意の形成にも欠かせぬものであつたと考えられる。過去の情報を共有することで、はじめて組織活動も可能になるのではないか。

③手留貸出と手留管理

次に「御手留御貸出帳」（天保十四年十一月）に注目して、貸出しについて、二・三事例を紹介したい。

天保十五甲辰年六月朔日之御自留

右御留六月十七日戸田様へ手留方奉札ニ而御貸ニ相成

(追記)

「六月廿一日御返却戸田様より」

右御留同月同日御師範様より以御直書代借ニ参、戸田様より御順借被成候様御返書為差出候、和田氏へ達之、然処猶又御下草以御直書御貸ニ相成候、右御草稿七月廿六日御返却ニ相成候

右は、天保十五年(一八四四)六月十七日、三宅が奏者番戸田淡路守の求めに応じて、「天保十五甲辰年六月朔日之御自留」を貸し出したときの記述である。戸田は天保十三年七月二十五日に大番頭から奏者番に登用された人物であり、登用から二年近くが経過していた。

手留の内容は明記されないが、「御自留」とあるため、三宅自身が発生させた手留である。⁽¹⁹⁾ また、天保十五年六月朔日の「御自留」を、同年六月十七日に貸与しており、自留作成が日々の経験から時間を置かずには作成されたことを確認できる。

ところで、右で興味深い点は、同じ六月十七日、世話役である師範板倉周防守からもこの自留の貸与を求められたことである。一般的には、師範は情報を提供する側であるが、弟子も経験年数が長くなると独自に情報を発生・取得するため、こうした逆転現象が起こったものであろう。これは手留情報の交換がたいへん広範であったことの証ともいえる。

なお、師範板倉からの手留貸与願は、直書での依頼であったが、すでに戸田氏へ貸し出した後であったため、戸田からの「順借」を直書をもって伝えている。「順借」は、いわゆる又貸しの方法であり、いちいち持主に返却することなく、借覧希望者の間を廻り、最後に持主に戻る貸与方法である。殿中儀礼の執行などに関わり、急を要する場合

は、こうした形で手留が貸し出されたのである。

また、右のケースでは、先方も相当に急いでいたものか、順借の連絡とは別に、手元の手留「草稿」を送っている。手留作成から時間も経過しておらず草稿が残っていたのであろう。

このように、殿中儀礼の執行に関わる情報は、手留という形で集約され、さまざまな形で相互に提供しあうことが行われた。また、重要な点は、貸借のうえ書写された手留も、そもそもは個々の奏者番によつて作成された点である。日々妙味深いことが発生すると、それを次々と手留（自留）に作成し、執務のための情報として、管理したのである。自留の貸借帳の存在は、そうした取り組みの一端を示している。

ところで、必要とする情報を的確に貸借しあうには、相当高度な情報管理が必要となる。たとえば、適切な情報提供には、求められる情報を速やかに探し出さねばならない。貸借行為は頻繁であるから、速やかに対処できなければ対等な付き合いも難しい。もちろん、部内的な利用においてもスピーディな検索が不可欠である。引き出しにインデックスを付与した筆筒で手留を管理する方法は、こうした中で生み出されたといえる。

そして、情報管理の必要性は、自らの利用、他者への貸与といった利用面に止まらない。すなわち、所持する手留情報の集約が曖昧であると、すでに所持する情報を重複して収集することになり兼ねない。手留は頻繁に貸借行為を繰り返すため、とくにその可能性が高かった。手留借込帳にも、借用した手留と同文のものをすでに所持するため、書写せず返却したとの記載がしばしばみられる。つまり、情報管理は手留をよりよく収集するためにも必要となったのである。

もちろん、奏者番達は、重複を避け効率よく手留を収集するための、何らかの工夫を有していたとすべきである。この方策は、基本的に表紙に凝縮していたと考えてよからう。内容そのもの（本文情報）を確認する方法では、時間

が掛かり過ぎる。表紙に記される情報は、内容タイトル、発生年次、発生源、書写系統であり、これらの情報が収集済みであるかどうか、その判断基準としての役割を負ったとすべきである。手留は以上のような情報が付与されることによって、同職者間にあつて存在価値を得たといえる。手留が手留足り得るための基本的な要件ということになる。もちろん、こうした表書の記述が、最初より完備して登場したとは考えられない。おそらく個人的な利用から、相互貸借による利用へと進展がみられるなかで、その記載は欠せぬものとなつたのであろう。

第五節 手留の内容と自留の作成

手留の借入・貸出などについて検討してきたが、実際の手留の記載を確認していない。次に手留の記述内容を示し、そのあり方から手留の特色を明らかにすると同時に、手留作成のための情報源についても考えてみたい。

〔表紙〕
明和二酉年

公家衆御返答之節当番勤方留

五月四日

土屋能登守留
内藤大和守写
松平伊豆守写
板倉阿波守殿より借写
三宅土佐守

明和二酉年

五月四日

土屋能登守

一今日公家衆御返答被仰出、我等儀就当番六半時前出宅、鬘斗目麻上下着用致登城部屋ニ罷在候処、同役衆何茂出仕、加役衆ニ茂御用日候得共美濃守・飛騨守罷出、今日者不快断茂無之候、西丸当番大和守且添越前殿候得共、先月廿八之御免進上帳、今朝於御本丸伊予守殿江被差出候由ニ而、先御本丸江被出相濟西丸江被相越候、五時過若年寄衆登城初候付、当番我等初同役衆何茂中之間江罷出候、老衆揃後我等儀見合先江大紋着替候、同役衆ニ茂追々大紋被着替何茂芙蓉之間江罷出候

一押小路大外記壬生官務拝領物先格之通広蓋口ニ而頂戴之儀、且於柳之間地下之者拝領物之節、正徳度之通三人宛罷出、同役三人ニ而取渡可申旨御懸り右近將監殿江以順阿弥相伺候処、何茂其通可仕旨被仰聞候付、御番順ニ而添出雲守兵庫殿被出候之様申談候

但同役衆三人出席之儀、拝領人二人罷出候節も其俣三人罷在候而不苦趣ニ伺相濟候段順阿弥申聞候、其趣ニ御目付衆江申談候事

(中略)

一八時頃老衆箱出、八打二寸頃老衆御用番共ニ明日之御座敷為見分表江御出之節、中之間ニ而時宜有之、若年寄衆ニも被出候、我等儀大目付衆一緒ニ跡付罷越、例之通御白書院見分之内小溜ニ罷在、夫より大廊下通大広間江御越西御縁通りより見分濟、直ニ御玄關より退出ニ付犀之御杉戸際ニ而御用番右京大夫殿江昨日端午御礼之儀相伺候処有之旨被仰聞候付、登城刻限茂伺候処、五時可有御出候旨被仰聞候付、其段大目付衆江相達、夫より部屋江罷越八半時前退出

(中略)

一 右京大夫殿以常阿弥御渡し候明日端午御礼、御白書院酒井左衛門尉御礼之次第書一通御渡ニ付明日之当番出雲守詰合候間、則相渡候

(中略)

一 明日 西丸添順之通伊賀殿被出候様申遣候事

右は土浦藩土屋能登守が作成した手留である。⁽²⁰⁾長文のため一部を省略したが、土屋能登守によって手留が作成され、それを内藤大和守が写し、松平伊豆守、板倉阿波守、三宅土佐守と順に書写したものである。

表紙には明和二年(一七六五)「公家衆御返答之節当番勤方留」とあるが、具体的には徳川家康一五〇回忌の勅会執行に関する内容である。多数の公家が江戸・日光へ下り、その任務が一通り終了した五月四日、將軍徳川家治が謝辞・拝領物を与えており、この手留はその時の様子を記している。「御返答」とは將軍から公家への謝辞の意である。

あらかじめ、手留の記述面での特徴を指摘するならば、その記述は殿中儀礼の執行のためのガイド的な内容ではなく、過去の実際の活動を時間を追って記したものである。右では明和二年五月四日の様子を時間の経過に従って記す。こうした記述は、各手留に共通することであり、この手留に限られることではない。したがって、手留の収集とは、過去の奏者番の活動情報の収集とすることもできる。

ところで、この手留を作成した土屋氏は、どのような状況のもとで、いかなる情報をもとに、手留(自留)を作成したのであろうか。当日、土屋は当番を勤めており、当番勤めによる情報が活用されたことは間違いない。この事例からは自留作成が当番の役割であるかのような誤解を生み兼ねないが、自留作成が当番・非番を問わずなされたこと

は、現存する多くの手留から明らかである。

また、注意したい点は、自留はそもそも自留として成立するのか、何らかの情報源があり、それをもとに作成されたのか、という点である。結論を急ぐならば、概ね次のように捉えることが可能である。

まず、後者であるが、自留はその作成を目的に独自に情報が収集されることはない。自留は後述のごとく奏者番廻状、奏者番日記をもとに作成されたとみられる。なかでも奏者番日記が重要な情報源であった。奏者番廻状の場合は、各奏者番へ回覧されるため、先にみたような広範な貸借関係は発生しにくい。貸借行為は、自己が有する記録類のうちに該当するものが存在しない場合にのみ行われるわけである。

奏者番日記が情報源であることの確認には、実際に現存している奏者番日記と、手留の照合が必要である。史料館所蔵の常陸国土浦土屋家文書は奏者番日記を多く含むため、手留との比較に最適な文書群といえる。前掲土屋作成の明和二年（一七六五）五月四日付自留「公家衆御返答之節当番勤方留」（田原町博物館所蔵）を事例に、奏者番日記「御奏者番勤向自筆留日記」（明和二年五月朔日〜六月晦日）との比較を試みた。その結果、厳密には文章を異にする箇所も確認できるが、両者はほぼ同文であることを確認した。つまり、それぞれ別の者が書いたとするにはあまりにも両者に共通点が多い。異同が見られることの説明が必要となるが、おそらく日記を元に手留を作成する過程で、言葉の加除や修整がなされたものであろう。それは手留としての完成度を高めるための作業でもあったわけである。

この点は、三宅家文書のなかに、日記を書写した上で朱を入れた手留草稿とみられるものが多数現存することからも想像される。手留は「手留方」に任命された家中によって作成されるが、彼らは藩主が記した奏者番日記をもとに、記事を適宜修正しながら手留を作成したわけである。

さて、これまで指摘してきたように手留は、他藩から借り入れて書写したものと、自藩で作成したもの（自留）に

区別できるが、他藩から借り入れた手留も、そもそものは諸藩が日記をもとに作成したということになる。なお、手留の実際の管理においては、他家からの手留と、自家作成分の手留を分けて管理することも見られる。三宅家でも、それぞれ別の箱に入れてこれを管理し、自藩作成の手留筆笥には「御自留」と記し、他藩借入のものと区別する（写真b参照）。

以上、奏者番手留の情報源は、多く奏者番が記した日記に基づいた。その呼称から当番の者が殿中で記した公務日記であるように連想されるが、大名土屋家文書の中にある奏者番日記を確認するならば、あくまで個人の日記であり、登城がなければ記述もない。個人の興味関心に従って記述が詳細に及ぶなど、生きた情報としての側面を強く有していたため、手留として利用したものと考えられる。

本稿では、職務遂行上、極めて重要な存在とされ、広範な貸借行為すら見られた手留が、個人の日記を情報源に作成されていることに注目したい。

職務に関する基本情報は、組織的に管理することが、今日では広く行われるが、奏者番の手留作成への取り組みからは、組織的な対応が不十分であるために、個々人が情報の収集活動に奔走していたように見受けられる。そうしたなかで自らが実見したところを執務執行のための情報として整備することも広く行われたのである。

また、手留は一度貸与されると、作成者とは無関係に書写されていく。私的なものの共用化が進むわけである。通常、公的な勤務であればなおさら、共用物は共用物として、最初から発生する。私的なものと共用のものは、予め分けて発生するというのが現代の状況である。

しかし、ここでは私的なものが広範に貸借され、共用のものであるかのように利用される。あたかもそれが公的なものであるかのようなものである。私的な世界が最大限に押し広げられた状況といえる。公的なことが私的な取り組みに支

えられていると言ひ換えることもできようか。

そういう中で、今日では私的なものとして捉えられがちな個人の日記も、たいへん創造的なものとなり、単なる備忘的な活用段階を越え、書写、加工され、新しい価値を生むことにもなったのである。かかる状況のもとでは、日記の記述そのものが問題となる。手留の情報源となることを念頭においた執筆が必要となる。現在確認される奏者番による日記のスタイルは、ほぼ共通しており、これもその影響と考えてよからう。手留情報の供用状況が、私的な日記の形をも画一化していったということである。役職に関わる情報すら自力で収集しなければならない状況のなかで、試行錯誤の後に生み出された日記利用のあり方ということもできよう。

結びにかえて

幕府奏者番の情報管理、情報の資源化の取り組みについて検討してきた。結ぶにあたり、江戸時代の情報管理の段階について、社会システムの一環としての文書システムとの関わりで簡単に述べたい。

近年、前近代の文書管理に関する研究が大いに進展しつつあるが、いくら管理を強調しても、当時の文書・記録の存在そのものの意味が追究されないことには、社会的な意味が追究されたことにならない。

江戸時代の場合、社会システムの一環としての文書システムはどのように整備されたのであろうか。文書量の増大などから江戸時代中期に大きな転換を指摘することも可能であるが、社会システム全体の中で文書の役割が如何に変化したのかそこが問題である。考えられる問題は三つである。ひとつは近世中期以前はどのような社会システムが

存在し、文書・記録はどのような役割を果たしていたのか。ふたつは非文書の社会システムから文書による社会システムへの転換に関する研究である。ここでは組織的な記録作成・管理がどのように確立してきたのか、そこが大きな問題であり、研究の蓄積も比較的よく見られるところである。三つめは転換後の社会システムと文書・記録との関係に関する研究である。

本稿は目指した研究は、三つ目の段階に関する研究といえるが、検討から見えてきた点はなかなか複雑である。

検討の対象となった時代は、組織的な文書利用・管理が相当に進んでいる段階といふべきであるが、江戸時代後期の館林藩秋元氏や田原藩三宅氏らの手留集積への取り組みからは、奏者番個々が日記を切り刻み、情報武装する状況を読み取れる。組織が情報を集積して、それを共同で利用する形が取られていたとはいえない。

しかし、検討から明らかとなった手留の管理や利用形態は高度な段階に達していたとすることもできる。組織的な記録管理は指向されながらも、実は家による記録管理も欠かせぬものとしてあり、そうしたあり方が高度に発達していったのが、江戸時代とは考えられないであろうか。基本的にそれは社会編成と組織構造のあり方に規定されるといえる。これらとの関わりで、記録管理も含めた情報管理の実態が追究されるべきである。

記録の存在をよりよく理解するには、アーカイブズ学の一環としての記録史料論がさらに深まりを見せることが重要と考えられるのである。

註

- (1) 安藤正人「記録史料目録論」(歴史評論)四九七号、一九九一年。
- (2) 大藤修「史料と記録史料学」(記録と史料)第一号、一九九〇年、「近世文書論序説(上・中)」(史料館研究紀要)二二・二三号、一九九一・一九九二年。
- (3) アークカイブズにおける史料群理解に関する研究動向については、拙稿「アークカイブズを理解するー史料群構造論の展開ー」(アークカイブズの科学)下巻、二〇〇三年を参照されたい。
- (4) なお、関連するものに拙著「江戸幕府と情報管理」(臨川書店、二〇〇三年)がある。本論文は同書第三章「幕府奏者番と情報管理」を踏まえたものである。あわせて参照願いたい。
- (5) 山県彦左衛門著「明良帶録」(改定史籍集覧)所収。
- (6) 松平太郎「江戸時代制度の研究」(一九一九年)。
- (7) 「江戸幕府職制の基礎的研究」広池学園出版部、一九九一年。
- (8) 「茨城県史研究」七六号、一九九六年。
- (9) 史料館収蔵常陸国土浦土屋家文書「奏者番勤方并心得」(史料番号四五五)。
- (10) 土屋家文書「御役中日記」(史料番号二二六)。
- (11) 大岡越前守忠相日記刊行会編「大岡越前守忠相日記」上・中・下巻(三一書房)を利用。
- (12) ちなみに廻状は各奏者番によって書写され「廻状留」が作成される。国立公文書館所蔵の「廻状留」では宝暦期から天保期のものが書写され、冊数は二〇一冊に及ぶ。伝来は不明であるが、奏者番就任者が、過去に遡って廻状情報を収集し、まとめたものと考えられる。つまり、天保期に集約できた廻状に関する情報は宝暦までということになる。これ以前に遡ることは不可能であったということであろう。もちろん、廻状の始まりを宝暦期とすることは出来ない。判明出来たのが宝暦期までということである。
- (13) 史料館蔵常陸国土浦土屋家文書「御役中日記」は、「御奏者番日記」の写しである。
- (14) 廻状には、西之丸当番が発する廻状や、押合が奏者番押合の者へ発する廻状もあった。
- (15) 老中の出迎えは毎日のことであり、奏者番のみならず、殿中の多くの役職の者が各詰所などで出迎える。奏者番は詰所である美容之間から中之間へ移動して迎える決まりであった。退出時も同様の形で見送るため、奏者番の

出勤時間は老中の登城時間より早く、帰宅は老中退出後が原則であった。

(16) 現在、館林市立図書館所蔵。

(17) 史料館所蔵常陸国土浦土屋家文書。

(18) 奏者番職の新任研修のためのシステム、師範・弟子制度に関して、とりあえずは拙著「江戸幕府と情報管理」

(臨川書店、二〇〇三年)を参照されたい。

(19) 作成者による手留は「自留」とも称される。書写による手留と区別する意味で、作成者による手留を本稿では自留と呼ぶことにする。

(20) 田原市博物館収蔵。

